●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 38

38th Letter

金山神社の鍛冶伝説

伝説そぞろ歩き

鍛冶職人
心一つに 藤袴
鉄という名の
わが身鍛錬

金山の地名発祥の地
鍛冶関係者の間で信仰

金山神社は、「金山」という地名発祥の地。金山神社は承和年間（834年～848年）に熱田神宮御修理職の鍛冶・尾崎彦四郎の先祖・善光が、自分の屋敷内に祀ったものが始まりといわれています。応承年間（1394～1428年）に屋敷は熱田の中瀬町に移されましたが、この神社はそのまま残され、『尾張徇行記』にも鉄山（かなやま）神社と記されています。

江戸時代になると、社殿も寂れましたが、鉄砲町の豪商・笹屋（後の岡谷鋼機）惣助が信仰して社殿を修復、明治になって鍛冶関係者の信仰を得て、本格的に整備・再興されました。

祭神は、金山彦、金山姫、天目一箇命（あまのまひとつのみこと）の3神。伊邪那美命（いざなみのみこと）が後に火の神となる迦具土命（かぐつちのみこと）を生んだ時、難産に苦しんだ末、亡くなります。その際、伊邪那美命の嘔吐物から生まれてきたのが、金山彦と金山姫で、嘔吐物の形状から鉱山の神として信仰されるようになったといいます。

天目一箇命は、天津日子根命（あまつひこねのみこと）の子で、天照大神（あまてらすおおみかみ）の孫にあたります。天岩戸神話での祭具用の刀剣・斧・鉄鐸を作ったのが天目一箇命で、鍛冶職人の神とされています。天目一箇命の中に「目一」が入っていて台風の目を連想させることから、暴風雨の神として信仰されています。

このように、金山神社は熱田神宮に関わる鍛冶関係者によって祀られたという言い伝えでしたが、それを物語るように神社周辺からは遺跡が発見されています。たとえば、神社からほど近くの金山一丁目に名古屋市民会館を建設する時、工事に先立って発掘調査を実施したところ、鉄カスが出土。また、熱田神宮周辺の高蔵遺跡からも鉄カスが出ていて、金山を中心とした一帯が熱田神宮の強い庇護を受けた鍛冶職技術者の集団居住地であったことが推察されます。

▲社殿の左側に樹齢700年以上のイチョウの古木がそびえ立つ金山神社

鍛冶の神様・ヘパイストス
プライベートは不遇な一面も

ギリシャ神話で鍛冶仕事の神様といえば、ヘパイストス。ゼウスと正妻・ヘラの間に生まれた息子です。オリュンポス12神の一員となったヘパイストスは、オリュンポス山上に神々の宮殿を建立しました。さらに、武具や農具、鍋釜から女神たちの装身具、そして神々の所持品に至るまで一切を作るのが彼の役割でした。

ゼウスの王座やアテナが持っているアイギス（神楯）、太陽神・ヘリオスの翼の付いた戦車、太陽神・アポロンやアルテミスの必殺の遠矢、プロメテウスをコーカサスの峰につないだ鎖も、すべて彼が作ったものです。そればかりか、トロイア戦争でギリシャ一番の英雄として活躍したアキレウスの武具一式もヘパイストスが作りました。エピメテウスと結婚したパンドラが持っていたパンドラの箱もヘパイストスの作品です。とても腕のいい鍛冶職人として神々の信頼を集めていました。

ヘパイストスのアトリエは、オリュンポス山上にあったとも、シチリア島のエトナ山の噴火口にあったともいわれています。後にレムノス島にもアトリエを設けます。

エトナ島のアトリエで彼の仕事を手伝ったのは、一つ目巨人・キュクロプスの息子たち、アルゲス、ステロペス、ブロンテスです。また、レムノス島のアトリエではヘパイストスの息子ともいわれるカベイロスが仕事を助けました。

美の女神・アフロディーテの夫としても有名ですが、自由奔放に恋愛を楽しむ妻に振り回され続ける寝取られ夫としてもクローズアップされ、アフロディーテはアドニス、ヘルメス、ポセイドン、アレスと次から次へと浮気を繰り返します。鍛冶の神様として大活躍した彼も、プライベートでは心労が絶えなかったようです。

※次回は住吉神社伝説について特集します。お楽しみに。

■ 写真／Kiyoshi K　■ イラスト／Rei　■ 取材・文／Icarus